

## 石田修大著 『我生きてこの句を成せり―石田波郷とその時代』

(本阿弥書店、二〇一二年)

和田 律子

本書の著者は、本学法学部教授石田修大氏である。そして、俳人石田波郷の令息である。さらに著者は、日経新聞文化部長論説委員としてコラム「春秋」や「私の履歴書」を担当した方でもある。本書紹介は、そのような著者と、日々親しく接している同僚の立場でのものであることを、まずお断りしておきたい。

本書は俳人石田波郷を中心にした、「俳句の黄金時代」である昭和戦前期の俳壇史である。しかし、読み進めると、単なる俳壇史とは異なる側面が随所にみられることに気づく。理由はいくつかあるが、そのひとつは、著者石田修大氏が波郷（本名石田哲大）の令息であることによっていると考えられる。身近で波郷を見ていた人にしかわからない、また、家族でなければ湧いてこないであろう深い理解と愛情が、本書全体を覆っている。

たとえば、波郷にはじめて俳句の手ほどきをし、水原秋櫻子との出会いのきっかけをつくってくれた故郷の恩師五十崎古郷の葬儀に、波郷は帰郷しなかった。そうした波郷を「頑固冷徹」と評した楠本憲吉の文を取り上げ、著者は「おそらく正しい指摘であろう」としながらも、「頑固冷徹は、渦巻く新興俳句運動の中で孤塁を守る青年波郷が身に付けた、不器用な処世の態度だったのかもしれない」（「友二、古郷―出会いと別れ」

—カギ括弧内は章段名、以下同じ）と、当時の波郷の置かれた立場の苦衷を思い遣り、波郷の心中に寄り添う。その筆致には、波郷を知り抜いた令息としての顔がのぞく。

ふたつめは、著者がジャーナリストとしての経歴と見識をもつことによるものであろう。本書は広い視野に立って叙述され、文章は平明簡潔で格調高い。とくに起筆部はみごとである。本書は月刊誌『俳壇』の連載が基になっていくそうで、連載という形式に拠るところがあるのかもしれないが、それにしても各章の起筆のみごとさは格別である。ある章は文学的に、ある章は時代の流れを時系列で冷静に捉え、というように書き出し部分は変化に富み、著者がかつて担当したコラム「春秋」や「私の履歴書」の文章を髣髴させる名文である。たとえば、「友二、古郷—出会いと別れ」の章は、以下のように始まる。

天の時、地の利、人の和という。三つの条件に恵まれる幸運はやたらにあるものではないが、波郷はそんな運に恵まれたようだ。

いかがであろうか。

また、本書は、近代日本の文化史・社会世相史に言及した部分も多く、日本の近代化黎明期の若者たちの精神史としても捉え得る読みものとなっている。ここにはジャーナリスト石田修大氏の、時代や人間に真摯に對しようとする姿勢と、それをわかりやすく伝えようとする意図をみてとることができる。

さらに、俳人や俳句にたいして随所にさりげなく組み込まれる短い評からは、俳句の実作者としての著者の顔ものぞく。

石田波郷の令息にして一流のジャーナリスト、俳人である著者ならではの著作といえよう。加えて、著書のなかにみられる、理想の道をひたむきに歩む波郷とその周辺の若き俳人たちに注がれる包容力ある慈愛のまなざしは、学生たちについて語るときに石田修大教授の眼そのものである。

俳壇史、文学史、社会世相史の書は数多いが、本書にはこれらの要素が絶妙のバランスで融合され、他の追随を許さない奥行きのある一書となっている。それも著者の如上の経歴に拠るところが大きいのではないか。考えてみれば、ジャーナリストも俳人も、事実を正確に深く追求し、そこから抽出した真髓を自らの感性で切り取るという点では共通するものがあるのかもしれない。

以下に、具体的に内容に触れながら本書の紹介をおこないたい。

本書には、著名な俳人文人の名前がまさに綺羅星のごとく登場する。虚子・秋櫻子・楸邨・草田男・三鬼・高村光太郎・中原中也などなど。中学高校時代の国語の教科書でみたことのある名前が次々に登場し、読んでいると近代文学史のおさらいをしている気分になってくる。しかし、そうした登場人物たちは、教科書のなかのセピア色の写真の人びとは異なり、俳句や文学活動に命をかけ、笑い、話し、悩み、考える、理想に燃えた青年群像として本書のなかでは活き活きと躍動する。たとえば、関東大震災直後の東京で波郷たち若き俳人や草野心平や中原中也が貧しさと戦いながらも創作活動に野心を燃やしつつ懸命に生きる様子を描く〔「貧しき詩人たち」〕部分には、近代俳句黎明期の青年群像が活写され、俳壇史であるとともに広く日本文化史の読み物としても興味深い。

本書は、山本健吉の「感受性鋭く自由柔軟な青年詩人の魂が新しい俳句運動の勃興に際会してあらゆる可能性を試みる機会を獲たということ、ここには時代の青春と個人の青春と、二つの青春のまれな幸運な出会いがある」という文を引きながら、二十歳の波郷が俳句修業のために水原秋櫻子を頼って故郷松山から上京し、若き俳人たちと出会うところから筆が起こされる〔「馬酔木」の三羽鳥〕。そして、伝統俳句の雄として屹立していた高浜虚子とその結社「ホトトギス」と、新しい主張を展開する秋櫻子との間で揺れながら、波郷は俳句の道をひたむきに歩むことになる〔「虚子、秋櫻子それぞれの道」〕。以下、波郷の俳人としての生涯が、俳壇

の交友関係を軸に描かれるのだが、その背景にあった波郷の生きた昭和初期を中心とした激動の時代の社会情勢への目配りも怠りない。

そして、最終章にいたるまで、適材適所の数多くの引用が織りこまれ、それが波郷とその時代のイメージに厚みを加える。とくに、昭和十年代前半、日中戦争前後の叙述は、俳壇関係資料を丹念につづり合わせ俳人達の不安や戸惑いを活写しつつ、当時の日本社会の置かれた危うい時代状況を緊迫感ある筆致で浮かび上がらせる（「京大俳句」事件特高が急襲）・「囿にされた三鬼」・「馬酔木」を去る秋邨・波郷」。圧巻である。その一方で、戦後、映画スターとして一世を風靡した大友柳太朗が波郷とは松山中学の同級生で、大友の誘いで俳句を始めたことなど、大友とのほのぼのとした逸話も織りこまれる（「大友柳太朗の誘い」）。構成の緩急自在なところにも著者の筆力を感じる。また、この章の「引用」も絶妙である。

さらに、一度は距離をおいた恩師水原秋櫻子との再会の場面の引用からは、時代の流れのなかでそれぞれに生活や主義主張に変容は生じても、俳句の未来を案じ理想を失わずに生きる二人の俳人の心の紐帯がひしひしと伝わってくる（「第二芸術」の弔鐘を撞く）。とともに、この部分の引用をとおし、日本の俳壇の希望のひとつであることも記しておきたい。これまでも折に触れ紹介してきたが、本書には膨大な資料が引用されている。資料は俳句関係書はもちろん新聞記事歴史書など広範にわたる。そして、資料の選択ならびに使用場所がじつに的確である。著者がいかに多くの資料に当たり、読みこみ、引用箇所と内容の選択に心を配ったかが窺われる。ジャーナリストとしての著者の面目躍如たるものを感じる。本書はその意味で労作といえよう。波郷の人生には、出征、戦地で病を得て生死の境をさまよった末の復員、戦後の療養生活と苦難の道が続くが、俳句への情熱は五十六歳で没するまで途絶えることがなかった。

このような波郷と俳句仲間たちの「信じられぬほどの熱意で俳句に取り組む姿」に、著者は感嘆し、「あの人たちはどうしてそれほど俳句に打ち込んだのだろう」（以上、「あとがき」と考える。そして、著者は、「激しく揺れ動く現象を追いかけるのに夢中で、もつとも大切なテーマを忘れてしまった気がする」（「あとがき」と自著にたいする反省の弁を記す。しかし、「激しく揺れ動く現象」を丹念に辿ったればこそ、波郷たちの枯渇しそうになる感性への危機感や、抑圧からの脱出を生きる支えに荒廃した社会を夢中で乗り切ろうとした心意気といったものが浮かび上がったのではないか。そして、著者によつて的確に切り取られ引用された波郷の言「私は、私の行く道はもうこの他にないと思つた。（中略）たゞひとり伝統派にとゞまつて胸を張つて拮抗し得たのは、この自負によつたに他ならない」（「辰之助去り、「鶴」創刊）、「われくはわれくは俳句をつくらう」（「生涯の一句」）が、本書のテーマを語つていよう。波郷と波郷をとりまく「俳句の黄金時代」の俳人たちは、それぞれの立場において自負をもつて気概をもつて俳句にひたむきに生きたのである。

俳句への理想を失わず、自らの道に正直に、努力に努力を重ねた波郷と、彼を取り巻くそれぞれに自分の生き方に真摯に向き合つた若き俳人群像をとおり、本書は近代日本文化の成熟への過程をも自ずから描出することになった。

さて、本書の題名は『我生きてこの句を成せり』である。波郷は「いろいろな俳句があるのだ。そしてどんな傾向にも、すぐれた句はあり得るし、そして多くはないのである。茲に我生きてこの句を成せりといひ得る句があればよいのである」と思い至り、そのうえで「俺には生涯の句があるのだらうか」と自問した（「生涯の一句」）。波郷のこの重い言辞を切り取りながら、著者は自身の人生への思いもまたこの一文に重ねているように思う。そして、また、分野を異にするにしても、ひとつことにひたすらに向き合つていきたいと願うひとびとにとつても、深く心に沁みる言葉であることだろう。

それにしても、口絵に掲載された波郷の若き日の写真は、なんと石田先生に似ているのだろう。現在、石田先生の温顔に親しく接している者にとっては、文学史のなかの偉大な俳人波郷は、石田修大先生をおして生身の石田哲大氏としてもいきいきと甦るのである。

最後に、稿者の個人的な欲張りな希望をひとつ述べさせていただきたい。それは、波郷の夫人で著者の母堂、俳人でもある石田あき子の動静も少し知りたかったということである。あき子は、波郷の俳句にかけた苦難と理想の道に寄り添い深い理解を示した。波郷が亡くなったときの絶唱「ひとたびは夫婦り来よ寒椿」があり、この句から題をとった句文集もある（著者御兄妹もしばしば登場している）。あき子もまた、波郷の生きた「俳句の黄金時代」を支えた大きな力のひとつではなかっただろうか。あき子の目からみた「俳壇の波郷」もぜひ拝読してみたい。

とはいえ、著者にとってはお身内のことであるし、著者にはすでに『わが父波郷』『波郷の肖像』の著作もある。いずれ別の機会にとのお考えもあろうか。

そろそろ紙幅も尽きる。触れるべき点はまだ多く、意を尽くせない部分も多いが、このあたりで稿を閉じることをお恕しいただきたい。

俳句に関心のある方にはもちろんのこと、近代日本の社会世相や文化史精神史などに関心を持つ方々にも、それぞれの立場から興味を喚起され、ひとの生き方を考えさせられる一書である。

ぜひ、ご一読をお薦めしたい。

（平成二十三年十一月一日刊 四六版二四五頁 二五〇〇円 本阿弥書店）